

2024 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 氏名 和田愛海

〈 研修概要 〉

2025 年 2 月 25 日から 3 月 6 日までの 10 日間、ベトナム研修に参加した。ホーチミン市ではチョーライ病院で臨床実習を受け、フエ市ではフエ医科薬科大学の学生との交流・附属病院での臨床実習を経験しました。

〈 研修参加の目的 〉

本研修に参加した目的は 2 つあります。まず、苦手なことに挑戦する積極性を養うことです。人前で話すこと、自分の意見を主張することが苦手なため、ベトナムの学生との交流や人前でのプレゼンテーションを通して自身の弱みに向き合い、苦手を克服したいと考えました。次に、異文化交流を通じ、先入観に捕らわれずに物事を多角的にみる力を養うことです。日常生活とは異なる環境や自身の常識とは異なる考え方を学び、この力を身につけたいと思いました。

〈 研修で学んだこと 〉

・チョーライ病院

チョーライ病院は患者数が非常に多く、患者数に対して検査装置が不足していました。多くの患者を受け入れるために検査精度よりも回転を重視しており、ポジショニングや照射範囲が厳密ではなく、アクセサリ類等をつけたままの検査が多かったです。また、撮影を終えた患者の退室を待たずに次の患者が入室しており、個人情報漏洩リスクが高い検査環境でした。日本と大きく異なる検査環境から、検査効率と安全性を両立する難しさを知りました。日本は高齢化による患者数の増加に対し医療従事者数が十分に確保されていません。高齢患者の検査では姿勢保持の困難、転倒リスクが高いなど、より慎重な対応が求められます。安全性を重視すると一件あたりの検査対応時間が長くなり効率性が損なわれる可能性があります。こうした状況から、医療需要逼迫が懸念されており、今後は検査効率と安全性の両立が課題となると思いました。

2 年次の実習では患者への配慮からマンモグラフィ検査を見学できませんでしたが、本研修ではポジショニングを間近で見学できました。乳房圧迫圧は日本が約 120N であるのに対し、ベトナムは約 80N でした。ベトナムでは圧迫圧を手動ではなく、装置による自動調整にて決定していました。高い圧迫圧は、乳腺の重なりを減らして病変視認性を向上させ、被曝を低減



▲チョーライ病院での臨床実習

できますが、痛みを伴います。日本では高圧迫圧、ベトナムでは低圧迫圧のメリットを優先していました。これらのトレードオフを理解し、圧迫の必要性について患者に適切な説明ができる放射線技師になりたいと思いました。

CT・MRI 室では静脈注射の場面も見学できました。日本では肘正中皮静脈の穿刺が一般的ですが、ベトナムでは手背静脈（橈側皮静脈または尺側皮静脈）に穿刺し、検査待ちの間に患者自身でルートを保持できるようにしていました。また、ベトナムの学生も静脈注射を実施していました。私は3年次の講義で静脈を上手く見つけられなかったため、ベトナムの学生の静脈穿刺技術に感心しました。

チョーライ病院の診療放射線技師の方々は忙しい診療業務の傍ら、私たちの質問にも丁寧に答えてくださいました。英語が聞き取れず、何度聞き返しても嫌な顔をせずに教えてくださいました。私もチョーライ病院の診療放射線技師のように、優しく他人を思いやれる放射線技師になりたいと強く思いました。

・フエ医科薬科大学

フエ医科薬科大学の交流プログラムでは、手根骨の英単語を覚えるゲームをしました。私たちが覚えやすいように、最初は似たスペルの単語、骨の形状のイメージなどから派生させて覚える方法を先方の先生が教えて下さり、簡単に覚えることができました。語呂合わせは世界共通の勉強方法でした。

附属病院での実習では、患者情報の入力やポジショニングを経験しました。講義内容を思い出してポジショニングしたにも関わらず中心位置や照射野サイズが上手く調整できませんでしたが、先方の学生は手際よく正確なポジショニングをしていました。また、検査画像において病変を見つけて疾患名を答えるなど、知識も豊富でした。多くの実践経験が知識の定着と深い学びにつながっていると感じました。私たちはベトナムの学生よりも臨床実習期間が短く、医行為にあたる照射や静脈穿刺などはできず、ベトナムの学生ほど臨床実習中に実践経験を積みませんが、座学にて基礎的な知識を確実に身につけたいと思いました。4年次の臨床実習では彼らのように意欲的に学び、多くの知識を身に付けたいと向上心が高まりました。



▲フエ医科薬科大学での授業



▲フエ医科薬科病院での臨床実習

・交流、観光

ベトナムは交通量が多いにも関わらず交通規則が守られておらず、道路の横断に危険を伴いました。私たちがホテルからチョーライ病院に安全に移動できるように、チョーライ病院の技師の方が毎朝ホテルまで迎えに来てくださいました。細かな気遣いに感動し、思いやりの心を持ちたいと思いました。

観光で訪れたベトナム戦争証跡博物館では、枯葉剤による奇形児たちの写真に強い衝撃を受け、化学兵器の恐ろしさを知りました。フエ医科薬科大学の学生との交流では、ベトナムの伝統衣装であるアオザイを着てフエ市内を観光しました。その際、Hieu 先生がベトナムの宗教や建物について詳細に説明してくださいました。その姿を見て、昨年の9月に先方の学生が京都に訪れた際に、日本や京都の建物や歴史について説明できなかったことを後悔しました。今後、同じような機会に恵まれたときは、事前準備を怠らずにおもてなししたいです。自由時間には先方の学生のバイクの後ろに乗せてもらい、一緒に食事や買い物に行きました。研修期間にはクラゲ、蟻、カエル、カタツムリなど、これまで食べたことがない食材にも挑戦しました。挑戦を楽しめるのが私の強みだと気づき、自分自身を深く知る機会になりました。



▲チョーライ病院スタッフとの
パーティーの様子



▲アオザイを着てフエ市内観光

〈 まとめ 〉

本研修を通し、積極的な行動の大切さを学び、自身に環境適応力が備わっていることに気付きました。病院実習、英語でのコミュニケーション、ベトナムの食文化などの貴重な体験ができました。また、先方の学生の知識量と積極性の高さに圧倒され、見習いたいと思いました。4年次の臨床実習では彼らのように積極的かつ意欲的に学ぶつもりです。人前で話すことへの苦手意識は完全には払拭できていませんが、積極的に交流した結果、研修前よりも人とのコミュニケーションに自信がつけました。今後はこの経験を糧に目標に向かって精進します。

〈 謝辞 〉

お忙しい中、本研修を受け入れて下さったチョーライ病院、フエ医科薬科大学の皆様に深く感謝申し上げます。引率して下さった玉木長良学長、霜村康平講師、本谷崇之助教、石田翔太助教のご指導に感謝いたします。本研修準備にあたり多大なサポートを賜りました職員の皆様に深謝の意を表します。